

工藤光一先生を偲ぶ

吉田 ゆり子

工藤先生は、病気と闘い、とてもつらい痛みを堪えながら、最期まで大学の教育と運営に対し、強い責任感をもって関わり続けられた。東京外国語大学は、1995 年改革以来、専門課程を言語・情報コース、総合文化コース、地域・国際コースという 3 つのコースに分けて学生のカリキュラムを編制していた。学生の配置は、1 対 2 対 3、といわれるように、地域・国際コースに所属する学生が最も多かったが、コースで開かれている授業には全く体系性がなかった。

2003 年度に、地域・国際コースのカリキュラム委員として、工藤先生をはじめとする先生方とともに、授業の編制を調える仕事に携わることになった。工藤先生は、外語大の二宮宏之先生のもとで 4 年間を過ごされた後に東京大学大学院に進学された経験から、歴史学の専門性を身につけさせる授業を設けたい、但し外語大らしい歴史学を、という理念のもとに、「Cultural Area Studies」という言葉を造り、その入門・概論・専門という授業編制を実現したいとおっしゃっていた。授業体系を「国際平和研究系」「国際開発協力系」「国際社会共生系」「歴史・アーカイブズ系」に分けた時、外語大らしい地域研究を、端的に示してくれる理想的な言葉に思われた。今も工藤先生の御遺志だと信じ、「Cultural Area Studies」をどのように実現したらよいのか考えている。

工藤先生は、私などがいうまでもなく、とても誠実な方で明るく積極的な輝きを持った発言をされてきた。カリキュラムの責任者を 2004 年に引き継いでくださった時、たいへんご苦勞をおかけしてしまった。その後、「もう委員会はいやだ」とまるで子供のような泣き声でおっしゃったのを耳にしてとても驚いた。本当にお辛かったのだと思う。

恩師の二宮先生が亡くなり、工藤先生ご自身の健康もよくないご様子で、さらにご家族のことでもたいへんご心配されているお姿を見て、何もお手伝いできないにも関わらず、とても気にかかっていた。その後、リンパに癌が転移しているにも関わらず、すでに放射線治療は限度を超えてしま

った、場所が悪く手術もできない、というお話をうかがい、ただただ、体力を温存して、何とか治癒されることを祈るばかりであった。多摩の駅でベンチに腰掛けておられる所にお会いし、病の進行についてお話をうかがうことがしばしばあった。夏休み、冬休み、春休みと、長期に授業がない時期が過ぎると、いつも工藤先生が大学に出ていらっしゃるか、顔をみるまで気が落ち着かなかった。

去年の 10 月にお会いしたとき、とてもお痩せになっていた。お声をかけられないまま 11 月の入院を迎えられ、その後、結局お顔を見ることも、お声を聞くこともできなかった。いつも、教授会の方では決まった席に腰をかけておられたが、今はその席は空いたままになっている。いつも大学の授業と学生のことを心配され、誠実に大学の業務をこなしてこられた先生に、教師として同僚として、心からの敬意と哀悼の気持ちを捧げたい。長い長い病気との闘い、お疲れさまでした。どうぞゆっくりお休みください。

(よしだ ゆりこ・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)